

---

『物流 Weekly』連載原稿

『日本ロジファクトリーの物流ケース・スタディー』

“社長！それは違います！” 第120回

---

<タイトル>

「棚にネックレスを！」

<本文>

前回に続き、今回も現場改善の具体的な手法をお伝えする。

今回はピッキングミス改善の手法である。

各現場で、それぞれの持つ背景や経緯などの違いからまちまちの手法を導入し、創意工夫を行っている。

一般的には「ロケーションの見直し」や「棚番地の設定」、「棚番地文字の拡大など」を行う。

「ピッキングリストなどの伝票文字の拡大」、「照度の見直し」などが次に来る。

ハンディスキャナでバーコードをなめることができるようなシステム化が進んだ現場では、このような苦労はさほど発生しない。

しかし、多くの現場は費用面や荷主の理解、そして荷姿による制約などから、マンパワーによる環境改善が主となっている。

これらの手法の中でも最も有効な手法の1つとして、ピッキングミスが発生させやすい商品の棚とその境界に、黄色の「ネックレス」を垂らす方法がある。

「ネックレス」とはいわゆる取り外しが容易なチェーンのことで、入り口手前から棚の奥行きまで等間隔で垂らすのである。

現場によっては、これに近いことを行っているが、徹底していないところが多くある。例えば、黄色のチェーンの代わりに赤のダンボールをその境界に差し込んでいるケース。これでは、右か左どちらかの商品が大幅に減少した時、そのダンボールが倒れかかってしまい、反対に作業性を悪くしてしまう。

また、黄色のチェーン1本を入り口手前部分にのみ垂らしている現場も多く見受けられるが、奥行きのある棚では、その奥側の商品が隣の商品と混ざることが多くある。

このように、色のついた目印をつけることで、「ピッキングミスが多い商品のため注意せよ」の意図も、中途半端なやり方や表面的な理解ではせっかくのアイデア、方法も効果を生み出さない。

なぜこのやり方が望ましいのかという理解の深さと実施、現場展開の徹底度合いが明暗を分けてしまう。

そういう意味では一度、導入した改善手法も検証と軌道修正、いわゆるPDCAが不可欠なのである。

---